



# 燈台本くらしー蓮如さまー

蓮如上人は、室町時代(西暦一四〇〇年代)という、日本が内乱に明け暮れ、また天災や疫病、飢饉のあいついだ、いろんな意味で人間が生きていくうえに困難な時代に、八十五年というながい生涯を生きられました。

とおきはちかき道理　ちかきは遠き道理　燈台本くらし

この言葉は蓮如上人の残されたお言葉のひとつです。人間にとって、一番近くにある存在はなんでしょうか。それは、言うまでもなく、私自身(わが身)でありましょう。しかし、蓮如上人はおっしゃいます。一番近いものが一番遠いと。遠いということは、いつも見えていない、いつも忘れて生きている、ということでしょう。「燈台本くらし」とは、そういう私たちの日常性をあらわしている言葉です。

ある年の真夏の夕方、用事があった友人のAさんの家を訪ねたことがありました。Aさんのお母さんは、冷蔵庫から冷えたビールにそえて、ビニールの袋にはいったピーナツを出してくれました。Aさんは、そのピーナツの袋を破ろうとするのですが、どうしても破れないのです。カツとなったAさんは、その袋を床にたたきつけて言いました。「なぜもつと破れやすい袋に入れておかないのだ」と。たたきつけられた袋をよく見ると、左上のほうに切り口があって、そこに「ここから開く」と書いてあるのです。そこをひっぱると、力を入れるまでもなく、スーッと開くことができました。袋が破れないのは、袋に原因があるのでしょうか。ささやかな出来事でしたが、なぜか忘れられない思い出です。

人間は自分の足もとの暗さに気づくことがなければ、自分を弁解(いいわけ)し、相手を責める世界しありません。それは、人間として、とても悲しく淋しい生き方ではないでしょうか。しかし、この一番近くにある私は、私の眼で見ることができず、私の知恵でも知ることができません。そこに、どうしても人間の眼や知恵のほかに、向こうから、この私の足もとを照らし、呼びかけてくださるはたらきに出遇うことが大事です。そのはたらきをナムアマダブツとも言い、ほとけさまの智慧とも、眼ともいいます。親鸞聖人や蓮如上人のお言葉がほとけさまの智慧、ほとけさまの眼なのです。

(金沢教区　松本梶丸)

